日本語能力測定テストで求められる読解ストラテジー

—「96 年度第二外語日語考科試題研発計画」の結果から—

落合由治/ Ochiai Yuji

淡江大學日文系 副教授

Department of Japanese, Tamkang University

【摘要】

台灣大學入學日本語能力測驗「2007 年試行試驗」，是與一般常見「日本語能力試驗」同樣的用意所製作完成之的讀解問題。就 2007 年度之測驗結果看來，像「日本語能力試驗」這種類型的考試，可以檢定出來的語言能力主要有兩種。其一是關於語言能力熟練度的基礎日語能力，其二則是關於考生問題解決能力的學習（讀解）策略能力。

而現今，在業界中備受要求的「社會語言能力」及「社會文化能力」兼備的日語人才養成的基本方向，亦與測驗中所窺得的基礎日語能力和學習策略能力相符合。此乃是在本次測驗結果，所獲得的一項寶貴的成果。

【關鍵詞】

日本語能力測驗、基礎日語能力、學習（讀解）策略能力、日語人才、養成

【Abstruct】

Japanese Language Proficiency Test for the university entrance exam of Taiwan "Trial examination in 2007" was made by the same aspect as "Japanese Language Proficiency Test". The following points were able to be understood from the analysis of the examination result of this comprehension problem. The examination of the type like "Japanese Language Proficiency Test" can measure a basic Japanese ability of the second linguistic competence. Moreover, the examination of this type can measure study (comprehension) strategy ability to control the reason for the problem solving.

The corporate world is requesting a Japanese human resources development that provides with "Social language ability" and "Social cultural ability" now. The examination result is requested to decide the promotion of a basic Japanese ability and the study strategy in a basic direction of the personnel training.

【Keywords】

Japanese Language Proficiency Test, basic Japanese ability, study (comprehension) strategy ability, Japanese human resources, training

【日本語摘要】

「日本語能力試験」と同じ視点で作られた台湾の大学入試用日本語能力試験「2007 年試行試験」の読解問題の試験結果からは、「日本語能力試験」のようなタイプの試験で測定できる能力には、第二言語能力の熟達度を示す基礎日本語能力と、問題に解決の筋道をつけ、その過程の実行をコントロールする学習ストラテジーの一部をなす読解ストラテジーの能力とがあることが推測できる。

現在、社会的要請が高まっている実業界での「社会言語的能力」や「社会文化的能力」を備えた日本語人材育成の基本的方向も、基礎日本語能力と学習ストラテジーの育成を基本として対応できることを、試験結果は示している。

【キーワード】

日本語能力試験　第二言語能力　学習ストラテジー　読解　日本語人材

1. はじめに

グローバル化の進展とともに日本語教育が普及、拡大するにつれて、台湾でも就職、進学、結婚あるいは日本への渡航など高等教育機関を卒業した日本語学習者の将来設計や進路選択に日本語能力が深く関わるようになってきている1。現在、こうした実生活で用いる実用目的での日本語能力測定を行う各種の能力テスト（以下、日本語能力測定テストと総称する）には、日本の公的機関が支援して作製された「日本語能力試験」2、「日本留学試験」3、「ビジネス日本語能力テスト」4があり、民間で開発されたものには「実用日本語検定」5などがある。また、外国人への通訳ガイドの国家試験として国土交通省

[1] 国際交流基金（2008）『海外の日本語教育の現状－日本語教育機関調査・2006年－(概要)』http://www.jpf.go.jp/j/japanese/survey/result/index.htmlによれば、日本語学習の目的は初等、中等、高等のどの教育でも「どの日本文化に関する知識を得る」、「日本語でコミュニケーションできるようになる」、「日本語という言語そのものに興味がある」は共通しているが、高等教育では「将来の就職のため」や「日本に留学するため」といった将来との結びつきが重視されている。また、「日本の政治・経済・社会に関する知識」のような特定の領域の高い知識を得ようとする傾向が見られる。学校教育以外の機関で特徴的なのは、「今の仕事で必要」、「留学、将来の就職のため」という実利的なニーズである。また、「日本に観光旅行するため」という交流目的も目立つ。

[2] 日本語能力試験（Japanese Language Proficiency Test、略称JLPT）は、財団法人日本国際教育支援協会と独立行政法人国際交流基金の主催で行われている、もっとも歴史の長い日本語能力測定試験の一つ。日本語非母語話者を対象に、日本語能力を測定し認定する公的な検定試験である。台湾では毎年12月に実施され、JLPTによれば2007年度は55,802人が受験し、全受験者の13.0%を占めている。

[3] 日本留学試験（Examination for Japanese University Admission for International Students、略称EJU ）は、独立行政法人日本学生支援機構が主催している、日本の高等教育機関や専修学校に入学を希望する外国人留学生を対象とした共通日本語能力試験である。アカデミック・ジャパニーズとして、それらの高等教育機関で必要とされる日本語能力および基礎学力の評価を目的とする。

[4] BJTビジネス日本語能力テスト（Business Japanese Proficiency Test、略称BJT）は、ビジネスでの日本語コミュニケーション能力を測定・評価する試験で、日本語非母語話者のビジネス関係者や学生を主対象としている。日本貿易振興機構（JETRO）が実施してきたが、2009年からは（財）日本漢字能力検定協会が継承する。

[5] 日本語検定協会・J.TEST事務局が1991年から実施している、日本語能力試験で日本語能力試験に相当する基礎と通訳やビジネスレベルにあたる実用に分かれている。同社のサイトによれば、中華人民共和国は「J.TEST実用日本語検定」を公式試験と認めている。

による「通訳案内士試験」がある[6]。台湾国内では「日本語能力試験」が広く実施されており、「日本留学試験」も（財）交流協会が提供している教育部実施の日本留学奨学金試験の 1 次試験として実施されているほか、（財）語言測験中心が 6 月と 11 月に実施し、「通訳案内士試験」も（財）語言測験中心によって 1 次試験が代行されている。台湾国内で作製された日本語能力試験としては、（財）語言測検中心による「外語能力測験」がある[7]。また近年では大学入試科目に日本語を入れる準備作業として、（財）台大大学考試中心により、「第二外語日語考科試題研発計画」の試行テストが毎年実施され、2007 年度も報告書が出された。

一方、日系企業が求める外国人ビジネス人材の日本語力については、以上述べたような日本語能力測定テストで測られる言語能力以外に「社会言語的能力」「社会文化的能力」が必要という調査報告が多く見られる[8]。通商経済産業省が日系企業への外国人就労促進条件を探るために行った（財）海外技術者研修協会（2007）「日本企業における外国人留学生の就業促進に関する調査研究」では、採用時の最低条件に「日本語能力試験 1 級」があがっており、「採用のポイントとして、「日本語能力」、「専門知識」、「日本語以

[6] 国土交通大臣が独立行政法人国際観光振興会に試験事務を代行実施している外国語に関する国家試験「通訳案内士試験」。現在、日本では外国人への通訳ガイドは通訳案内士として登録した者のみが観光客に対して外国語通訳および観光案内を行うことができ、違反した者は罰金刑に処せられる。（参照http://www.jnto.go.jp/jpn/interpreter_guide_exams/index.html）

[7] 台湾での英語検定「全民英検」を行っている（財）語言測験中心が実施している外国語能力試験で、日本語のほかフランス語、ドイツ語、スペイン語などが行なわれている。http://www.lttc.ntu.edu.tw/FLPT.htm

[8] 台湾での日系企業が求める人材と能力の実態調査には石川清彦・池田万季（2004）「日系企業が期待する日本語能力」『いろは』16（財）交流協会がある。工藤節子（2004）「台湾の日系企業関係者が見たコミュニケーション問題」『台灣日本語文學報』19号台湾日本語文学会は、日本人と台湾人の異文化コミュニケーション上の摩擦原因として、労働意識に関する「ずれ」と行動様式に関する「ずれ」を整理している。また、「日本語能力試験」と日系企業が求める人材と能力の関係を考察した野元千寿子（2007）「日系企業が現地社員に求める「ビジネス日本語」の実態」『ポリグロシア』13立教大学は、アジアでのいくつかの先行研究を踏まえ中国大陸・大連市でJETROが行った日系企業への聞き取り調査をもとに、企業の現場では日本語能力1級以上の能力が必要とし、「現在、採用基準になっている「日本語能力試験」は知識の正確さを求めており、現場で必要とされるコミュニケーション能力を測っているとは言いがたい」と結論付け「日本語能力試験」で測れるような言語的能力に加えJ.V.ネウストプニー（1995）『新しい日本語教育のために』大修館P103が定義するような「社会言語的能力」「社会文化的能力」が必要だとしている。

外の語学力」が上位を占め、採用の際、日本語能力を重視し、日本語以外の語学力としては、英語力、留学生の母語を期待する傾向にあった[9]。調査の結果、日本語学習者が日系企業に勤める場合求められる課題として以下の３点が挙げられている。

①ビジネスに必要な日本語能力の向上

・ 相手や場面に応じて使い分けるコミュニケーション能力

・ 電話やメールなどの「非対面型」コミュニケーション能力

・ 文書や資料の作成・理解

②ビジネス文化・知識の理解

・ 日本企業の組織性、仕事の進め方の理解等

③我が国企業で働く社会人を意識した行動能力の向上

・ チームワーク、規律意識、協調性、ビジネスマナー等[10]

しかし、こうした実業界の要望や実態に基づく能力調査では、「日本語能力試験」などで測られる言語能力（これを基本日本語能力と呼ぶ）と、「ビジネスに必要な日本語能力」、「ビジネス文化・知識の理解」、「社会人を意識した行動能力」（これらを総称して実業能力と呼ぶ）との相関関係は必ずしも明確ではなく、日本語教育の現場で実業界に卒業生をより順調に送り出すためにどのような課程を編成すればよいのか、まだ未知数の部分が多い。さらに効果的な課程編成のために今後、基本日本語能力と実業能力との関係についてさまざまな方法で調査を進めていく必要がある。

ただ、幾つかの調査から、その相関関係を推測することはできる。横山紀子・木田真理・久保田美子（2002）は、口頭での日本語運用能力測定テストである OPI の合格者と「日本語能力試験」の合格者との相関性を調べ、OPI の超級の合格者は、「日本語能力試験」2 級、3 級の高得点者と強い相関があることを指摘している。宮岡弥生・玉岡賀津雄・毌育新（2004）は中国大陸出身の日本語学習者について「日本語能力試験」形式の文法テストと、敬語語形および敬意の対象の妥当性を調べる敬語テストの結果の相関を調べ、両者に強い相関があることを指摘している。吉永尚（2007）は JETRO などが作製したビジネス向けの知識などの測定テストが入っている日本語能力測定テストである「ビジネス日本語能力テスト」の合格者級と「日本語能力試験」の合格者級との間に強

[9] （財）海外技術者研修協会（2007）「日本企業における外国人留学生の就業促進に関する調査研究」通商産業省http://www.meti.go.jp/press/20070514001/20070514001.html

[10] 同注8

い相関が見られることを指摘している。

以上のように、「日本語能力試験」が測定している基本日本語能力と、ビジネスで要求が高い敬語表現あるいは、OPI や「ビジネス日本語能力テスト」などが測定しようとしている「社会言語的能力」や「社会文化的能力」を含む実業能力に関係の深い日本語能力を測定する試験の結果とが相関するという指摘からは、基本日本語能力が高ければ、実業能力である「社会言語的能力」や「社会文化的能力」に必要な能力も成長させやすいという仮説を立てることができる。そうした仮説を裏付けるのは、学習ストラテジー相互の相関性である。大学英語教育学会（2005）、大学英語教育学会（2006）は外国語学習の成否は、「学習課題の直接的操作」である「認知ストラテジー」と学ぶ環境での「情意面のコントロール」をする「社会・情意ストラテジー」との効果的な利用を司る、「学習プロセス全体の司令塔」であるメタ認知ストラテジーがうまく使えるかどうかにかかっていると述べている（大学英語教育学会 2006：10-11）。以上から、「日本語能力試験」などで測定される基本日本語能力での日本語の問題処理のストラテジー（以下、解答ストラテジーと呼ぶ）が実は「社会言語的能力」や「社会文化的能力」のストラテジー運用や問題解決能力にも深く関わっていることが予想される。

そこで、本論文では、台湾の日本語初級学習者について受験者の解答の定量的傾向が把握できる（財）大学入学考試中心により実施された「第二外語日語考科試題研発計画」の 2007 年試行テストの結果[11]から、学習ストラテジーの中では複雑な各種のストラテジーを複合して身につける必要のある「読解」問題を選び、まずテストの成績から「読解」問題の難易度を決定し、次に解く場合に学習者が用いていると推測される正解を出すための過程を推測して、日本語能力試験 1 級の読解問題の解答ストラテジーと比較することで、同傾向の日本語能力測定テストでの「読解問題」に必要な読解能力の傾向を整理し、読解指導で何を指導すべきかを提案したい。

2．読解試験（閱讀測驗）の概要と結果の分析

以下、まず 2007 年度の大学入学考試中心「第二外語日語考科試題研発計画」読解試験（以下、「2007 年度試行試験」と略す）の実施概要を紹介し、続いてテストの成績から「読解」問題の難易度を決定して、解く場合に学習者が用いていると推測される正解を出すための過程を推測してみたい。

[11] 2007 年の試行テストの結果は、趙順文・賴錦雀・蕭次融・林文賢・篠原信行・王淑琴・盧錦姫・落合由治（2008）『大学入学考試中心　九十六年度第二外語日語考科試題研發計畫』大学入学考試中心を参照。

2.1 出題基準と形式

高校生の大学入学試験として開発中の日本語能力測定試行テストである「両年度試行試験」は 計画で策定されすでに確定している日本語能力試験 4 級程度の基礎語彙 1000 と基礎文法（日本語初級教科書前半程度、以下「計画初級語彙文法」と呼ぶ）、日本語能力試験 3 級程度の進階語彙 2000 と進階文型（日本語初級教科書後半程度、以下「計画中級前期語彙文法」と呼ぶ）にほぼそった範囲で、聴解、語彙、文法、読解、作文の 5 問題に分けて作成され、試行試験が行われている[12]。

今回取り上げる「2007 年度試行試験」の読解問題は、学習時間 1 年程度の初級者向けと学習時間２年程度の中級前期者向けに分かれ、初級者向けには「基礎問題」2 題が、中級前期者向けには「基礎問題」2 題に加えて、「進問題」1 題の合計 3 題が設けられている。読解問題の概要は以下のとおりである。

（a）文型と語彙

「2007 年度試行試験」の「基礎問題」の語彙と文型は、「基礎問題１」が「計画初級語彙文法」の範囲で、また「基礎問題２」が「計画初級語彙文法」と「計画中級前期語彙文法」の語彙と文型の範囲から出題されている。「進階問題」は、出典となった生教材の内容を「計画初級語彙文法」と「計画中級前期語彙文法」の範囲の語彙と文型に合わせて書き換え、範囲外の語には注を付けている。

(b)本文の字数と内容

「2007 年度試行試験」では、本文の字数は「基礎問題」は 200 字前後、「進階問題」は 400 字前後を目安に作成されている。

(c)出題形式

出題形式は、すべて 4 選択肢形式で、「基礎問題」2 題に各 5 問が設けられて合計 10 問、「進階問題」に 5 問があり、「基礎問題」と「進階問題」全体で 15 問ある。設問の仕方はすべて正解を 1 つ選ぶものである。

2.2 試行テストの対象と実施状況

「2007 年度試行試験」の「基礎問題」の試行対象は台湾北部の学校の高校生または大学生での日本語学習歴 1 年程度の学生（以下、「初級者」）で、「進階問題」も同じく台湾北部の学校の高校生または大学生での日本語学習歴 2 年程度の学生（以下、「中級者」）

[12] 基礎と進階の語彙、文法策定の概要は趙順文他（2008）P44～57参照。また、基礎と進階の語彙、文法の一覧表はP185～249参照。

である13。試験は「基礎試験」60 分、「進階試験」100 分で行われた。

表 1　「2007 年度試行試験」の実施状況

年度	高校生試行テスト	大学生試行テスト
2007 年度	2007 年 12 月（初級者 305 名／中級者 224 名）	2007 年 12 月～1 月（初級者 373 名／中級者 362 名）

2.3 試行テストの結果と分析

2.3.1 試行テストの正解率から見た問題の難易度

以下、まず「2007 年度試行試験」の読解問題の正解状況を示す。「基礎問題」は初級者を基準に、正解率の高い問題から低い問題に並べ、「進階問題」は該当する中級者の正解率の部分に置いた。なお、初級者の「基礎問題」第 31～40 問は中級者の「基礎問題」第 61～70 問と同じ内容である。中級者の「進階問題」第 71～75 問は、初級者の解答範囲にはない。

表２　「2007年度試行試験」読解問題の正解率と問題順位

題番号	得点ランク	初級者解答選択項目				問題正解率		題番号	中級者解答選択項目				問題正解率	
		A	B	C	D	初級者	題順位		A	B	C	D	中級者	題順位
31	T H L	0 0 0	99* 100 97	0 0 1	0 0 1	99 100 97	1	61	1 1 1	98* 99 97	1 0 2	1 1 0	98 99 97	1
32	T H L	2 0 5	1 0 2	2 0 6	95* 100 87	95 100 87	2	62	2 0 5	1 0 1	1 0 1	97* 100 93	97 100 93	2
34	T H L	2 0 –	2 0 –	94* 100 –	3 0 –	94 100 –	3	64	2 0 –	1 0 –	96* 99 –	2 1 –	96 99 –	3
35	T H L	91* 100 77	2 0 5	6 0 16	1 0 2	91 100 77	4	65	95* 100 87	0 0 1	4 0 10	1 0 3	95 100 87	4
38	T H	7 0	87* 100	2 0	4 0	87 100	5	68	3 0	94* 100	2 0	2 0	94 100	5

[13] 「2007年度試行試験」の実施状況は趙順文他（2008）P3～6参照。なお、以下、「2007年度試行試験」に関するデータ、問題文はすべて趙順文他（2008）を参照。

	L	19	65	5	11	65			5	86	4	5	86	
33	T	5	2	85*	8	85*	6		1	1	91	7	91	6
	H	0	0	91	9	91		63	0	1	93	6	93	
	L	15	6	72	7	72			3	1	86	10	86	
37	T	3	16	70*	12	70*	7		1	9	78*	12	78*	7
	H	0	3	94	3	94		67	0	2	95	4	95	
	L	7	33	39	21	39			3	21	51	25	51	
	T								13	11	70*	5	70*	8
	H							74	3	6	91	1	91	
	L								24	20	45	10	45	
39	T	4	59*	27	10	59*	8		2	66*	25	7	66*	9
	H	0	91	8	2	91		69	0	92	8	0	92	
	L	10	22	43	24	22			3	37	42	18	37	
	T								13	15	64*	8	64*	10
	H							72	7	5	85	3	85	
	L								21	18	49	11	49	
	T								14	56*	18	10	56*	11
	H							71	2	92	5	1	92	
	L								26	22	28	22	22	
40	T	21	45*	10	24	45*	9		13	55*	6	25	55*	12
	H	13	75	2	10	75		70	4	86	3	6	86	
	L	24	17	20	39	17			19	28	11	40	28	
	T								16	10	19	55*	55*	12
	H							73	3	3	6	89	89	
	L								28	16	29	25	25	
36	T	1	7	33*	59	33*	10		0	6	40*	54	40*	13
	H	0	3	61	37	61		66	0	1	64	35	64	
	L	4	12	14	70	14			1	10	22	66	22	
	T								12	38*	21	28	38*	14
	H							75	6	59	3	31	59	
	L								17	21	42	18	21	

註：1.各数値は%で「初級者」と「中級者」の中での比率を示す。

2.T：受験生全体の比率、H：高得点者の比率（前から 33%），L：低得点者の比率（後から 33%）

3.各項目の比率＝該当する人数÷該当グループ（全体、高得点者、低得点者）の人数

4. ABCD は各問題の選択肢で数字はそれぞれを選んだ比率である。各問題の正解は「*」で示している。

5.2007 年度「基礎問題」34 の L の数値は提供データが欠如している。

6.趙順文他 2008：95 表 44 から作製。

読解問題出題で用いられた語彙と文型は「日本語能力試験」3、4 級程度の出題基準に合わせて策定された「計画初級語彙文法」と「計画中級前期語彙文法」の範囲で言語

的基礎条件は同じであった。しかし、「2007 年度試行試験」の正解率は、平均値で初級者の最高 99%の第 31 問から、最低 33%の第 36 問までの幅となり、中級者も最高 98%の第 61 問（問題は初級の 31 問と同じ）から、「基礎問題」では第 66 問（初級の 36 問と同じ）が最低で 40%、「進階問題」では 38%で第 75 問が最低というように正解率に大きな幅が生じた。表２からは以下のような点が読み取れる。

表２の正解率の「題順位」を見ると、初級者での「基礎問題」の正解率の順番の並び（31、32、34、35、38、33、37、39、40、36 の 1～10 位までの順位）と、中級者での「基礎問題」（61～70 番）の問題の正解率の順位の並び（61、62、64、65、68、63、67、69、70、66 の順位）とは同じ順番での並びになっている。また、「計画初級語彙文法」を使った「基礎問題１（31～35）」より「計画中級前期語彙文法」まで広げた「基礎問題２（番号下線部 36～40）」の方が、正解率は低くなっており、問題毎の難易度は、初級者にとっても中級者にとっても基本的に語彙と文法が増えて難しくなる（以下、言語的基礎条件と呼ぶ）ほど、正解率は下がるという同じ傾向にあったと考えられる。

しかし、表２の中級者での「基礎問題（61～70 番）」の正解率の順位の並びと、語彙と文型では中級用の問題である「進階問題（71～75）」の問題の正解率の順位の並び（61、62、64、65、68、63、67、74、69、72、71、70、73、66、75 の順位）を見ると、「進階問題」の問題の正解率（番号下線部）は全体的には「基礎問題」より低くなっているが、語彙と文型では初級用の問題である「基礎問題」の 69、70、66 は、「進階問題」の問題の正解率とほぼ同じ正解率である。このことから、必ずしも言語的基礎条件だけが、正解率を決めているわけではないことが分かる。

そこで、何が正解率に差をつけたのかを推測するために、正解率の差によって各問題のグループ分けを試みた。表２の正解率の分布は、Ｈ（高得点者・前から 33%のグループ）とＬ（低得点者・後ろから 33%のグループ）に分けて見てみたとき、初級者の 31、32、34、中級者の 61、62、64、65、68、63 では、ＨとＬの差はいずれも 1%～15%未満で、ＨとＬの差はほとんどないかあるいは顕著ではないのに対して、初級者の 35、38、33、37、39、40、36 および中級者の 67、74、69、72、71、70、73、66、75 では、ＨとＬの差は 20%以上～60%未満あり、かなり顕著か非常に開いていると言える。ＨとＬの正解率のこうした差から、高得点者と低得点者との間に解答の正解率に大きな差を生む何らかの要因があり、問題の難易度が決まったと考えることができる。

表３　Ｈ（高得点者）とＬ（低得点者）の正解率の差

ＨＬの差	初級者	中級者	難易度
15%未満	31、32、34	61、62、64、65、68、63	低度
20%～40%未満	35、38、33	67、74、69、71、70、73、66、75	高度（かなり高度）
40%以上	37、39、40、36		

今回の問題は、以上の表３のようにＨとＬの正解率の差から言えば、初級者は 15%未満（容易）、20%～40%未満（高度）、40%以上（かなり高度）という三つのグループに分けられ、中級者は 15%未満（容易）とそれ以上（高度）という二つのグループに分けられる。

そこで、より厳密に問題の難易度の順序を決めるために「2007 年度試行試験」の総得点により受験者の正解率を 20%ずつの区切りで A～E の 5 段階（A を最高、E を最低とする）に分け、そのランクの受験者がどの程度正解しているかのデータ[14]を使って、各問題の正解率に A～E の 5 段階にランク分けされた受験者の正解率がどの程度関係しているか、因子分析を行った[15]。以下の図１に中級者の結果を例として示した。同様の手続きを初級者にも行った。

図１　中級者の読解試験の正解率ランクに対する因子分析結果

```
$rotation
[1] "Varimax"

$correlation.matrix
          Var.1     Var.2     Var.3     Var.4     Var.5
Var.1 1.0000000 0.9085624 0.7898670 0.6585757 0.5078546
Var.2 0.9085624 1.0000000 0.9435515 0.8655304 0.7128040
Var.3 0.7898670 0.9435515 1.0000000 0.9527684 0.8251721
Var.4 0.6585757 0.8655304 0.9527684 1.0000000 0.9088015
```

[14] 趙順文他（2008）P10-12表10、表11を参照。

[15] 因子分析の計算には統計ソフト「Ｒ」を用いた。中級者の5段階に分けた正解率データに対し、主因子解による因子分析プログラムPFA関数を用いてバリマックス回転を指定した結果、固有値１以上の有効因子数１という結果が出て、以上の図１のような分析結果になった。因子１だったため回転の結果は示されていない。なお、初級者にも同じ条件で分析を行った。PFA 関数は群馬大学社会情報学部青木繁伸氏による。http://aoki2.si.gunma-u.ac.jp/R/参照。

```
Var.5 0.5078546 0.7128040 0.8251721 0.9088015 1.0000000

$communality
      Var.1      Var.2      Var.3      Var.4      Var.5
0.6000868 0.9298229 1.0051247 0.9067776 0.6493258

$before.rotation.fl
                FAC.1
Var.1 -0.7746527
Var.2 -0.9642732
Var.3 -1.0025591
Var.4 -0.9522487
Var.5 -0.8058076

$before.rotation.eval
    FAC.1
4.091138

$after.rotation.fl
[1] NA

$after.rotation.eval
[1] NA
```

その結果、図１のように１つの因子が出て、第 1 因子に対する各問題の因子得点は以下のようになった。因子得点の配列から見ればこれは全問題の正解率全体に対して各問題の正解率がどの程度関わっているかを示していると考えられる。

表４　読解試験各問題の第 1 因子に対する因子得点

初級者の読解試験各問題の得点			中級者の読解試験各問題の得点		
問題	score	正解率での順位	問題	score	正解率での順位
Obs.31	-1.23083142	31	Obs.65	-1.02461772	61
Obs.32	-1.16208680	32	Obs.64	-0.96295875	62
Obs.34	-1.05966793	34	Obs.61	-0.92692818	64
Obs.35	-0.96406613	35	Obs.68	-0.88846825	65
Obs.38	-0.92033806	38	Obs.62	-0.88390208	68
Obs.33	-0.68851526	33	Obs.63	-0.80010812	63
Obs.37	0.01199671	37	Obs.67	-0.60245337	67
Obs.39	0.71009633	39	Obs.74	0.01576162	74
Obs.40	1.79976250	40	Obs.69	0.10181307	69
Obs.36	2.95073233	36	Obs.72	0.69165847	72
			Obs.71	0.85179271	71
			Obs.70	0.93641726	70
			Obs.73	1.06216407	73
			Obs.75	2.16094372	66
			Obs.66	2.16389942	75

表２で見た、正解率による順位と比べてみると、初級者の場合は、因子得点での順位と正解率による順位は一致し、中級者の場合は、正解率の 61、62、64、65、68、63、

67 までの順位が因子得点での順位と入れ替わりが見られるものの上位7題のグループは同じで、正解率下位の 74、69、72、71、70、73、の順位は同じで 66、75 は入れ替わった。表２の正解率の平均値による順位、表３のＨ（高得点者）とＬ（低得点者）の正解率の差による順位に比べて、各問題の因子得点を基準に見れば、このデータの場合は各問題の難易度を的確に序列化できた。

また、問題の難易度も因子得点がマイナスのグループとプラスのグループとで大きく分類でき、それぞれ「基礎問題」の読解問題の難易度は、31、32、34、35、38、33 までが低難度、37、39、40、36 が高難度、また、「進階問題」の読解問題の難易度は、65、64、61、68、62、63、67 までが低難度、74、69、72、71、70、73、75、66 が高難度と分けることができる。

以上のような正解率の特徴から、問題の難易度には語彙と文型の難易度という言語的基礎条件以外にも、高得点者と低得点者を分ける別な要因が大きく関係していると考えられる。

2.3.2 試行テストの難易のもう一つの要因

難易度のもう一つの要因は何であろうか。個人データが公開されていないため「2007 年度試行試験」にあった「聴力」「語彙」「文法」「読解」の各領域の個人得点に関する因子分析などの多変量解析はできないので、ここでは「読解」問題の設問内容に関する質的分析により、難易度のもう一つの要因を推測してみたい。

ここでは、表４の中級者の因子得点による順番で低難易度の問題群と高難易度の問題群に分けて、それぞれ正解を出すために必要な手続きを推理してみる。

(1)低難易度の問題に対する解答の手続き

低難易度の問題には、以下のような「基礎問題」（一）の 61 から 65 までの問題 5 問が入っている。

資料１　「基礎問題」（一）

基礎測験（一）

わたしの日本語学校のクラスには、7 人の留学生がいます。(1) わたしは高雄の高校 2 年生ですけれども、今年の春日本に来ました。わたしは日本の料理はとてもおいしいと思っています。だから、(2) 日本料理のレストランを持ちたいです。留学生のクラスメートのキムさんは銀行員です。日本でも (3) その仕事をしたいといいました。わたしは同じ台湾の陳さんとよく日本語会話を練習しています。陳さんは台北の会社員です。(4) 日本語を 2 年勉強してから日本に来ました。医者の劉さんは本が好きで、よく読みます。わたしも好きです。(5) 2 人で週末によく図書館へ行きます。

61：「(1)わたしは＿＿＿＿＿です。今年の春、日本に来ました。」わたしはなんですか。
A銀行員　B留学生　C会社員　D医者

62：どうしてわたしは(2)日本料理のレストランを持ちたいですか。
A日本語が好きだから
B日本にいるから
C日本に友達がいるから
D日本の料理がおいしいから

63：(3)その仕事は、どんな仕事ですか。
A会社　B図書館　C銀行　Dレストラン

64：だれが(4)日本語を2年勉強してから、日本に来ましたか。
Aわたし　Bキムさん　C陳さん　D劉さん

65：どうして(5)2人で週末によく図書館へ行きますか。
A2人は本が好きで、図書館でよく読みます
B2人は仕事が好きで、図書館でよく調べます
C2人は日本語の勉強が好きで、図書館でよく練習します
D2人は料理が好きで、図書館で料理の本をよく借ります

趙順文他 2008：171 参照

これらの問題を解く手順を、解答時に参照する本文の量、出題とそれが問うている問の意図、解答を出す手順の3点に分けて考察した。

表５　「基礎問題」(一）の解答手順

番号	参照する本文量	出題とその意図	解答を出す手順
65 (35)	医者の劉さんは本が好きで、よく読みます。わたしも好きです。2人で週末によく図書館へ行きます。(3文)	出題の「どうして(5)2人で週末によく図書館へ行きますか。」の「2人」の意味が本文の前文のある「劉さん」「わたし」であることを本文の該当部分から読み取る。【単純指示】	①　設問の日本語の内容を理解した上で、本文で対応する部分の日本語を理解する。《複数文理解》 ②　設問の意図を推測しながら、対応する参照点を設問の直近の本文の前後部分から探す。《推測》→《文・関連語彙捜索》→《探知》 ③　設問との対応関係を見て、選択肢を選ぶ。《判定》
64	わたしは同じ台湾の陳さんとよく日本語会話を練習しています。陳さんは台北の会社員です。(4)日本語を2年勉強してから日本に来ました。(3文)	出題の「だれが(4)日本語を2年勉強してから、日本に来ましたか。」の「だれ」が、本文の「陳さん」に当たることを該当部分から読み取る。【単純指示】	
61	わたしの日本語学校のクラスには、7人の留学生がいます。(1)わたしは高雄の高校2年生ですけれども、今年の春日本に来ました。(2文)	出題の「(1)わたしはです。今年の春、日本に来ました。」の「＿＿＿」に当たる部分を本文（1）の該当部分から読み取る。【単純指示】	

62	わたしは日本の料理はとてもおいしいと思っています。だから、(2)日本料理のレストランを持ちたいです。(2 文)	出題の「どうしてわたしは(2)日本料理のレストランを持ちたいですか。」にあたる部分が、「だから」より前にあることを読み取る。【単純関係】	
63	留学生のクラスメートのキムさんは銀行員です。日本でも(3)その仕事をしたいといいました。(2 文)	出題の「(3)その仕事は、どんな仕事ですか。」の「その」が指す内容を前文から読み取る。【単純指示】	

問題は、すべて選択肢に本文と同じ単語が反復されている形式であり、設問が意図している該当部分が指す本文を参照する（これを単純指示と呼ぶ）か、設問が意図している該当部分と関係した本文を参照する（これを単純関係と呼ぶ）ことで、解くことができる。本文・設問の語彙と文型が理解でき、設問の意味と本文との繋がりが理解できていれば、以下のような手順で容易に解けるものと考えられる。

① 設問の日本語の内容を理解した上で、本文で対応する部分の日本語を理解する。《複数文理解》

② 設問の意図を推測しながら、対応する参照点を設問直近の本文の前後部分から探す。《推測》→《文・関連語彙捜索》→《探知》

③ 設問との対応関係を見て、選択肢を選ぶ。《判定》

また、2 問が低難易度になった「2007 年度試行試験」の結果から推測できる解答ストラテジーは以下のような内容である。

資料２ 「基礎問題」（二）

基礎測験（二）

わたしの家族は旅行がとても好きです。毎年夏休みに家族でいっしょに旅行をします。

去年の正月におじが台湾の歴史のビデオをくれました。鄭成功のはなしがおもしろかったです。だから、去年の夏に(1)台南へ行きました。台南を見ながら、父と母はわたしにいいました。「ふるい家がたくさんありますね。めずらしい食べ物もおおいから、(2) 観光客は台南へよく来ますね。」

今年の夏にわたしのともだちが東京ディズニーランドへ行きました。ともだちはいいました。「高いですけれども、かわいい(3)お土産を買いましたよ。つぎは大阪へいくつもりです。」だから、(4) わたしは家族といっしょに旅行の本を見ました。大阪はおいしいものが食べられるでしょう。京都は歴史があるから、きれいでしょう。東京はデパートや地下鉄がおおいです。いろいろ考えて、今、わたしたち家族は東京で遊ぶつもりです。

（注）東京ディズニーランド：東京迪士尼樂園　京都：日本的古都

66：どうして家族で(1)台南へ行きましたか。いちばん正しいのはどれですか。

A冬にともだちが台南へ行きました

B父と母が珍しい食べ物がおおいといいました

Cわたしたちがビデオを見ました

Dおじが鄭成功のはなしがおもしろかったといいました

67：どうして父と母は「(2)観光客は台南へよく来ますね」といいましたか。
A父と母は台南のビデオがいいと思いました
B父と母は台南の家や食べ物がほしいと思いました
C父と母は街を見ながら建物や料理がいいと思いました
D父と母は歴史や料理のはなしを聞きたいと思いました

68：ともだちはどこで(3)お土産を買いましたか。
A大阪
B東京
C京都
D台南

69：(4) わたしは家族といっしょに旅行の本を見ました。計画で、わたしたち家族はどうしますか。
A東京はかわいいお土産がおおいです。でも、高いので行きません
B東京はショッピングや交通がべんりです。つぎは東京へ行きたいです
C大阪はおいしい料理があります。つぎは大阪へ行きたいです
D京都は歴史がふるくて、きれいです。つぎは京都へ行きたいです

70：この文章を読んで、正しいものを選んでください。
Aともだちは日本でかわいいお土産を買いました。つぎはいっしょに行きたいです
Bわたしたちは台南の街を歩きました。旅行の本を読んで、今、日本へ行きたいです
Cわたしたちは台南の料理のビデオをもらいました。日本でおいしいものを食べたいです
Dおじとわたしたちは歴史が好きです。旅行の本を読んで、京都や東京にいくつもりです

趙順文他 2008：172-173 参照

同じように、これらの問題を解く手順を、解答時に参照する本文の量、出題とそれが問うている問の意図、解答を出す手順の 3 点に分けて考察した。

表6　「基礎問題」（二）の解答手順

番号	参照する本文量	出題と意味	解答を出す手順
68	今年の夏にわたしのともだちが東京ディズニーランドへ行きました。ともだちはいいました。「高いですけれども、かわいい(3)お土産を買いましたよ。つぎは大阪へいくつもりです。」（3文）	出題の「ともだちはどこで(3)お土産を買いましたか。」の「どこ」の意味が本文の前文にある「東京ディズニーランド」であることを本文の該当部分から読み取る。【単純指示】	①　設問の日本語の内容を理解した上で、本文で対応する部分の日本語を理解する。《複数文理解》 ②　設問の意図を推測しながら、対応する参照点を設問の直近の本文の前後部分から探す。《推測》→《文・関連語彙捜索》→《探知》 ③　設問との対応関係を見て、選択肢を選ぶ。《判定》
67	台南を見ながら、父と母はわたしにいいました。「ふるい家がたくさんありますね。めずらしい食べ物もおおいから、	出題の「どうして父と母は「(2)観光客は台南へよく来ますね」といいましたか。」の「どうして」が、前文の「ふるい家がたくさんありますね。めずらしい食べ	

	(2) 観光客は台南へよく来ますね。」(3 文)	物もおおいから」に当たることを該当部分から読み取る。【単純関係】	
69	今年の夏にわたしのともだちが東京ディズニーランドへ行きました。ともだちはいいました。「高いですけれども、かわいい(3)お土産を買いましたよ。つぎは大阪へいくつもりです。」だから、(4) わたしは家族といっしょに旅行の本を見ました。大阪はおいしいものが食べられるでしょう。京都は歴史があるから、きれいでしょう。東京はデパートや地下鉄がおおいです。いろいろ考えて、今、わたしたち家族は東京で遊ぶつもりです。(9 文)	出題の「(4) わたしは家族といっしょに旅行の本を見ました。計画で、わたしたち家族はどうしますか。」の「どうしますか」に当たる部分を本文の該当部分から読み取る。 【複数関係】	① 設問の日本語の内容を理解した上で、本文で対応する部分の長文の日本語を理解する。《段落理解》 ② 設問の意図を推測しながら、対応する参照点を設問の長文の中から探す。《推測》→《段落内捜索・関連文捜索》→《探知》 ③ 似た設問相互と本文との対応関係を判定して、最も正しい答えを推理する。《推論》 ④ 本文と設問との対応関係を、本文や設問の表現を置換したり類義関係で入れ替えたりして、最も正しい答えを推理する。《置換推論》あるいは、違っている部分を消して、該当しやすいものを残す《消去法》
70	本文全文 (17 文)	出題の「この文章を読んで、正しいものを選んでください。」に対して、A～D の選択肢の内容をひとつひとつ本文と対照させて、間違いを消し、最も当てはまる該当部分を照合させる。 【置換推論】【消去法】	
66	わたしの家族は旅行がとても好きです。毎年夏休みに家族でいっしょに旅行をします。 去年の正月におじが台湾の歴史のビデオをくれました。鄭成功のはなしがおもしろかったです。だから、去年の夏に(1)台南へ行きました。(5 文)	出題の「どうして家族で(1)台南へ行きましたか。いちばん正しいのはどれですか。」の A～D の選択肢の内容をひとつひとつ本文と対照させて、間違いを消し、最も当てはまる該当部分を照合させる。 【置換推論】【消去法】	

以上から、68、67 ともに、参照する本文量は 3 文程度、出題の意図も出題が指示する前文の内容を見つける「単純指示」あるいは、前文で関係する部分と選択肢との対応を見ればよい「単純関係」が問われている内容で、解答を出す手順は「基礎問題」(一)と同じと考えられる。

(2)高難易度の問題に対する解答の手続き

一方、高難易度に分類された 74、69、72、71、70、73、75、66 のうち、69、70、66 が「基礎問題」（二）である。これから見ていくことにする。

まず、表６のように、68、67 に比べて参照する本文量は 69 が最低 9 文、70 は本文全体で 17 文、66 は最低 5 文で、いずれも段落単位あるいは本文全体を読み切る必要がある。

また、設問の意図も、複数の該当部分から選択肢に最も近いものを選ぶ（これを複数関係と呼ぶ）、あるいは、A～D の選択肢の内容をひとつひとつ本文と対照させて、類義語などに置き換えたり間違いを消したりして、最も当てはまる該当部分を照合させる（これを置換推論・消去法と呼ぶ）というような、65、64、61、68、62、63、67 までの低難易度の問題での「単純指示」「単純関係」とは異なる、複雑な手順を取る必要がある。

こうした要素が複合して、正解を出すための手順も量的質的に低難易度の場合とは異なる。仮に以下のように手順をまとめた。

①設問の日本語の内容を理解した上で、本文で対応する部分の長文の日本語を理解する。《段落理解》

②設問の意図を推測しながら、対応する参照点を設問の長文の中から探す。《推測》→《段落内捜索・関連文捜索》→《探知》

③似た選択肢相互と本文との対応関係を判定して、最も正しい答えを推理する。《推論》

④本文や設問の表現を置換したり類義関係で入れ替えたりして最も正しい答えを推理する。《置換推論》あるいは本文と設問との対応関係を、違っている部分を消して該当しやすいものを残す《消去法》。

さらに、「進階問題」の解答手順について見てみる。

資料３　「進階問題」

進階測験　つぎのはなしをよく読んで答えてください。

高さんは地球温暖化（ちきゅうおんだんか）から地球をまもる仕事をしている女性だ。そのためにお金を集めている。ニュースではそれを（1）環境（かんきょう）ビジネスといっている。わたしは高さんのはなしを聞いて、おもしろいと思った。

高さんは（2）あたらしいチャンスを生活の中でいつも探すそうだ。「あたらしいチャンスから人生のおもしろさが生まれる」と、高さんははなしている。

それから、「あたらしいチャンスを探してみると、(3)人間の知識や仕事の力がかなり眠っている」と高さんはいっている。高さんは以前コンピューター会社の社員だったが、銀行へうつ

った。それから、日本へ行って 40 歳のとき環境ビジネスを学びはじめた。そして、(4) 3 年後台湾へ帰って会社をはじめた。そこで社長になれる力を発見したのだ。

（注）地球温暖化：全球溫室效應問題。隨著二氧化碳等溫室效應氣體在大氣中增加，地球變得難以發散熱能，使其成為宛如在溫室之中的狀態，故稱之為溫暖化。

（参考資料：ＮＢオンライン「茂木 健一郎　超一流の仕事脳」2007 年 10 月 9 日　「生きている「実感」は挑戦から生まれる～環境金融コンサルタント　吉高まり」http://business.nikkeibp.co.jp/article/person/20071004/136806/を改編）

71：(1) 環境（かんきょう）ビジネスはあたらしい仕事です。どんな仕事ですか。いちばんちかいものを選んでください。
Ａ地球温暖化をすすめる仕事
Ｂ地球温暖化をとめる仕事
Ｃ地球温暖化をしらべる仕事
Ｄ地球温暖化を発見する仕事

72：高さんとおなじように (2) いつもあたらしいチャンスを生活の中で探すなら、なにをすればいいですか。高さんのはなしを読んで、いちばんちかいものを選んでください。
Ａ毎晩よく寝て健康に注意したり、よく運動したりする
Ｂ女ならお金持ちと結婚したり、男なら大きい会社の社員になったりする
Ｃいつも情報を探したり、外国へ勉強に行ったりする
Ｄゲームでよく遊んだり、音楽を聞いたりアニメを見たりする

73：(3) 人間の知識や仕事の力はかなり眠っていると、ちかい意味はどれですか。
Ａ人間はよく眠らないと、仕事や知識の力が使えない
Ｂ眠っている人は仕事や知識の力を使っていない
Ｃ眠っているとき人間は仕事や知識の力が使えるかもしれない
Ｄ人間は知識や仕事の力をまだ全部使っていない

74：高さんは (4) 3 年後台湾へ帰って会社をはじめた。なぜでしょうか。
Ａもう一度コンピューター会社の社員になって、チャンスがほしいから
Ｂ銀行の仕事が好きだから、あたらしい仕事を探したいから
Ｃ日本でおもしろい仕事を知って、チャンスだと思ったから
Ｄわたしの話を聞いて、おもしろいと思ったから

75：今の高さんは簡単に言うと、どんな会社の社長をしていますか。いちばんちかい会社を選んでください。
Ａ激しくなる地球温暖化のニュースを放送する会社
Ｂ激しい地球温暖化を予防するお金を集める会社
Ｃ世界で地球温暖化の問題を見つける会社
Ｄ地球温暖化から地球をまもる省エネルギーの会社

趙順文他 2008：173-174 参照

高難易度に分類された 74、69、72、71、70、73、75、66 の 71～75（番号下線部）は「進階問題」である。「進階問題」は生教材の「ＮＢオンライン「茂木 健一郎　超一流の仕事脳」」のあるインタビュー記事を出題基準に合わせて改編し、字数も 400 字程度に短縮したものだが、今回の正解率の因子分析による難易度の判定結果では「基礎問題」

（二）の難易度とほとんど変わらないか、むしろ「基礎問題」（二）の 66 が最も難しくなっており、単純に語彙と文法の難易度だけで読解の難易度が決まっているわけではないことを示している。

前と同じように、これらの問題を解く手順を、解答時に参照する本文の量、出題とそれが問うている問の意図、解答を出す手順の 3 点に分けて考察した。

表７　「進階問題」の解答手順

番号	参照する本文量	出題と意味	解答を出す手順
74	高さんは以前コンピューター会社の社員だったが、銀行へうつった。それから、日本へ行って 40 歳のとき環境ビジネスを学びはじめた。そして、(4) 3 年後台湾へ帰って会社をはじめた。そこで社長になれる力を発見したのだ。（4 文）	出題の「高さんは (4) 3 年後台湾へ帰って会社をはじめた。なぜでしょうか。」の「なぜ」に当たる部分が (4) の前文にあることを本文の該当部分から読み取る。【複数関係】	①　設問の日本語の内容を理解した上で、本文で対応する部分の日本語を理解する。《複数文理解》 ②　設問の意図を推測しながら、対応する参照点を設問の直近の本文の前後部分から探す。《推測》→《文・関連語彙捜索》→《探知》 ③　設問との対応関係を見て、選択肢を選ぶ。《判定》
72	本文全体（11 文）	出題の「高さんとおなじように (2)いつもあたらしいチャンスを生活の中で探すなら、なにをすればいいですか。高さんのはなしを読んで、いちばんちかいものを選んでください。」に対して、A～D の選択肢の内容をひとつひとつ本文と対照させて、間違いを消し、最も当てはまる該当部分を照合させる。 【消去法】【置換推論】	
71	高さんは地球温暖化から地球をまもる仕事をしている女性だ。そのためにお金を集めている。ニュースではそれを (1) 環境ビジネスといっている。わたしは高さんのはなしを聞いて、おもしろいと思った。（4 文）	出題の「(1) 環境ビジネスはあたらしい仕事です。どんな仕事ですか。いちばんちかいものを選んでください。」のに対して、A～D の選択肢の内容をひとつひとつ本文と対照させて、間違いを消し、最も当てはまる該当部分を照合させる。 【消去法】【置換推論】	①　設問の日本語の内容を理解した上で、本文で対応する部分の長文の日本語を理解する。《段落理解》 ②　設問の意図を推測しながら、対応する参照点を設問の長文の中から探す。《推測》→《段落内捜索・関連文捜索》→《探知》 ③　似た設問相互と本文との対応関係を判定して、最も正しい答えを推理する。《推論》 ④　本文と設問との対応関
73	それから、「あたらしいチャンスを探してみると、(3)人間の知識や仕事の力がかなり眠って	出題の「(3) 人間の知識や仕事の力はかなり眠っていると、ちかい意味はどれですか。」に対して、A～D の選択肢の内容をひと	

	いる」と高さんはいっている。高さんは以前コンピューター会社の社員だったが、銀行へうつった。それから、日本へ行って 40 歳のとき環境ビジネスを学びはじめた。そして、(4) 3 年後台湾へ帰って会社をはじめた。そこで社長になれる力を発見したのだ。(5 文)	つひとつ本文と対照させて、間違いを消し、最も当てはまる該当部分を照合させる。 【消去法】【置換推論】	係を、本文や設問の表現を置換したり類義関係で入れ替えたりして、最も正しい答えを推理する。《置換推論》あるいは、違っている部分を消して、該当しやすいものを残す《消去法》
75	それから、「あたらしいチャンスを探してみると、(3)人間の知識や仕事の力がかなり眠っている」と高さんはいっている。高さんは以前コンピューター会社の社員だったが、銀行へうつった。それから、日本へ行って 40 歳のとき環境ビジネスを学びはじめた。そして、(4) 3 年後台湾へ帰って会社をはじめた。そこで社長になれる力を発見したのだ。(5 文)	出題の「今の高さんは簡単に言うと、どんな会社の社長をしていますか。いちばんちかい会社を選んでください。」の A～D の選択肢の内容をひとつひとつ本文と対照させて、間違いを消し、最も当てはまる該当部分を照合させる。 【消去法】【置換推論】	

以上の「進階問題」も、参照する本文量は 4 文から全体で、「進階問題」(二) の高難易度の問題と同様に、いずれも段落単位あるいは本文全体を読み切る必要がある。

また、設問の意図も、「進階問題」(二) の高難易度の問題と同様に、複数の該当部分から選択肢に最も近いものを選ぶ「複数関係」か、あるいは、A～D の選択肢の内容をひとつひとつ本文と対照させて、類義語などに置き換えたり間違いを消したりして、最も当てはまる該当部分を照合させる「置換推論」や「消去法」を用いる必要がある。こうした要素が複合して、正解を出すための手順も量的質的に低難易度の場合とは異なり、「進階問題」(二) の高難易度の問題と同じようにまとめられるであろう。

①設問の日本語の内容を理解した上で、本文で対応する部分の長文の日本語を理解する。《段落理解》

②設問の意図を推測しながら、対応する参照点を設問の長文の中から探す。《推測》→《段落内捜索・関連文捜索》→《探知》

③似た選択肢相互と本文との対応関係を判定して、最も正しい答えを推理する。《推

論》

④あるいは、本文や設問の表現を置換したり類義関係で入れ替えたりして最も正しい答えを推理する《置換推論》。あるいは本文と設問との対応関係を、違っている部分を消して該当しやすいものを残す《消去法》。

これらは、先に見た「基礎問題」(二)の高難易度69、70、66と、参照する本文量、設問の意図、解答手順も同程度と言える。

以上見てきたように、解答時に必要量の本文を参照し、出題とそれが問うている問の意図を理解して解答を出す手順を設定するという形で、設問の問いかけに対して正解を選ぶのに必要な一連の受験者の作業を解答ストラテジーと呼ぶとすれば、低難易度の問題を解くのに必要な解答ストラテジーと、高難易度の問題を解くのに必要な解答ストラテジーは明らかに異なっているところがあると言える。

従って、高得点者と低得点者の差を付けているのは、語彙・文法という基礎言語事項と並び、こうした解答ストラテジー運用が大きく関係していると見られる。

3. 解答ストラテジーの難易度と学習方法

以上、考察してきた結果をもとに、最後に今回のテスト結果から推測された解答ストラテジーと、それを身につける学習法について考えてみたい。

3.1 解答ストラテジーの難易度

「2007年度試行試験」の結果から推測できる解答ストラテジーは、以下のように、難易度をつけることができる。ただし、これらはあくまでも正解率による問題の低難易度と高難易度の質的差異が生まれた一因から推測された仮説的なもので、また問題作成者である教師側の視点での解き方の一例であり、実際にどのように学習者が問題を解いているかは実地調査が必要である。ここでは仮の解答ストラテジーとして示していることをお断りしておきたい。

(基礎ストラテジー)

①設問の日本語の内容を理解した上で、本文で対応する部分の日本語を理解する。《複数文理解(2〜3文)》

②設問の意図を推測しながら、対応する参照点を設問の直近の本文の前後部分から探す。《推測》→《文・関連語彙捜索》→《単純指示・単純関係探知》

③設問との対応関係を見て、選択肢を選ぶ。《判定》

以上は、今回の低難易度の問題のように、本文と設問とに同じ語彙あるいは、ほぼ近い語彙が使われている場合の手続きであり、参照する本文量も少なく、本文と選択肢

との類似点を見つけられれば非常に解答は容易である。

しかし、設問で使われている語彙が本文の語彙と異なっていたり、類義の意味に置き換わったりしていると、単純な対応関係を見つけるだけでは正解は分からず、次のような解答ストラテジーが必要になる。

（応用ストラテジー）

①設問の日本語の内容を理解した上で、本文で対応する部分の長文の日本語を理解する。《段落理解・本文全体理解》

②設問の意図を推測しながら、対応する参照点を設問の長文の中から探す。《推測》→《段落内捜索・関連文捜索》→《複数関係探知》

③似た設問相互と本文との対応関係を判定して 最も正しい答えを推理する《推論》

④本文や設問の表現を置換したり類義関係で入れ替えたりして最も正しい答えを推理する《置換推論》。あるいは本文と設問との対応関係を、違っている部分を消して該当しやすいものを残す《消去法》

以上は、今回の高難易度の問題のように設問と本文とに単純な対応関係が見つからない場合に推論を繰り返して行い、本文と設問との間にある内容の類似点と相違点から最も近い選択肢を見つけるのに必要な解答ストラテジーであり、本文と設問との表現を同時に置換しながら正解を探す必要がある点で、意味的に選択できる幅は広がり、より解答が困難になる。

3.2「日本語能力試験」の読解問題タスクとの比較

次に、今回の「2007 年度試行試験」の読解問題の結果から推測できる解答ストラテジーと、「日本語能力試験」の出題基準になっている「読解問題タスク」とを比較して見る。「日本語能力試験」の読解問題は、「タスク」として大きく「（α）そのタスクが何を問題としているか（いわゆるスキル）」と「（β）そのタスク処理に関わるテキストの大きさ（テキスト内の単位）」とによって作製され、また、「（α）そのタスクが何を問題としているか（いわゆるスキル）」は、大きく「A テキスト中の特定の言語形式について問うもの」と「B テキスト機能を中心とした読みのタスク」に分かれ、「A」には「言語形式」「事実関係」「意味解釈」「予測」「推論」「情報総合（テキスト全体からの情報）」が「B」には「テキスト機能」があがり、これらを基準に問題作成が行われている（国際交流基金 2002：227-229）。

「日本語能力試験」の読解タスクと「2007 年試行試験」の読解ストラテジーとを比較した表８を以下に示す。

表８　「日本語能力試験」読解タスクと「2007 年試行試験」読解ストラテジー比較

問題の単位 問題の性質	表記（音）	語句	文単位	段落・文間	文章・段落間
①テキスト内の言語形式を問う	■文脈での読み方、語の区切り	■○同一内容語 指示先行詞	■○		
②テキスト内の事実関係を問う	■	■○	■○発話者の特定、行為者、理由、場所、時、方法、対象、目的等を問う、文中人物の意見、意見と事実の区別、時間関係		
③意味解釈に関するもの	■	■◎多義表現、比喩表現 同義表現、文脈的意味、 省略の復元、意味の推測		◎	
④展開予測に関するもの			省略復元	省略復元 接続詞挿入 次の文	段落順序 接続詞挿入 次の段落
⑤推論的なもの			含意、言外の意味、人物の心理、前提 ◎		
⑥テキスト全体からの情報の総合				■◎因果関係把握、事柄の順序、筆者の意見、理由や根拠の取り出し、要約、内容正誤、小見出し、タイトル付け	
⑦テキスト機能全体をタスクにする					■◎主張、態度意見、読後処理、話題

註：1.■印は「日本語能力試験」3、4 級の読解タスク

2.○印は「2007 年試行試験」低難易度の読解ストラテジー、◎印は高難易度の読解ストラテジー

3.国際交流基金 2002：228 タスク表から作製

表８のように「日本語能力試験」3、4 級の読解タスクでは、問題の単位の中心は「表記（音）」「語句」「文単位」に置かれ、問題の性質の中心は「テキスト内の言語形式を問う」「テキスト内の事実関係を問う」「意味解釈に関するもの」にあり、文脈での「読み方」「語の区切り」、「同一内容語」と「指示詞」、「発話者の特定、行為者、理由、場所、時、方法、対象、目的等を問う、文中人物の意見、意見と事実の区別、時間関係」などが設問になっている。「2007 年度試行試験」でも、「語句」「文単位」で同じ「同一内容語」と「指示詞」、「発話者、理由、目的等を問う、文中人物の意見」などで同じ問題を出し、これらは低難易度の問題という結果が出た。しかし、3、4 級の出題範囲にある「多義表現、比喩表現、同義表現、文脈的意味、意味の推測」などは、いずれも「2007 年度

試行試験」では高難易度であり、また、3、4 級の応用範囲にあがっている「段落・文間」「文章・段落間」を単位とした「テキスト全体からの情報の総合」「テキスト機能全体をタスクにする」場合も高難易度になった。

今回の「基礎問題」と「進階問題」で、問題で参照すべき「問題の単位」量が多い、段落あるいは問題文全体の流れを理解して設問の該当部分を探す能力が求められる問題や、「計画初級語彙文法」だけを使った「基礎問題」（１）よりも「計画中級前期語彙文法」の範囲あるいは生教材を活かした語彙や文法の範囲で出題された「基礎問題」（２）、「進階問題」の方が難易度が高くなったことから、受験者の基礎的日本語能力の差は、こうした「問題の単位」という量的拡張に影響すると見られ、読解に影響を及ぼしやすいと考えられる。これは「日本語能力試験」の読解タスクの難易と一致している。

また、「日本語能力試験」の「問題の性質」でより高度とされる「意味解釈に関するもの」、「推論的なもの」、「テキスト全体からの情報の総合」、「テキスト機能全体をタスクにする」は「2007 年度試行試験」でも同じく高難易度であり、これらは基礎的日本語能力に基づいた言語運用のストラテジーの一種と考えられ、こうした形式での試験では、「問題の単位」と並んで難易度に大きく影響すると言える。

3.3 読解問題の解答能力を伸ばす学習法

最後に、今までの読解に関する先行研究を参考にしながら、今回の「2007 年度試行試験」で想定できた読解問題の解答能力を伸ばす学習方法について見ることにする。

（a）語彙力と読解力

英語に関する研究ではあるが門田修平・野呂忠司編（2001）によれば、語彙力は読解力に大きな関係を持っている。英語の TOEFL での結果では、TOEFL の読解と総合では語彙力 3000 語以下と以上で非常に差があり、3000 語が分岐点になっている（門田修平・野呂忠司編 2001：42-43）。また、語彙量と同時に語彙をどう使うか、どんな意味で使えるかなどの語彙知識の深さには相関関係があり、語彙の広さと深さが読解力に影響している（門田修平・野呂忠司編 2001：45-46）。

今回の試験結果から見れば、同じ「基礎問題」でも中級者の方が得点がかなり高く、英語の場合と同様に語彙力は読解力に関係が深いと推測される。まず語彙量（広さ）を増やし、続いて語彙の運用（深さ）をさまざまな形で訓練する必要があると言える。

（b）記憶処理と読解力

門田修平・野呂忠司編（2001）によれば、第二言語学習でも一時的に読んだ内容を記憶しておける能力（ワーキングメモリー）が高いほど、複雑な構文にさまざまな解

釈ができるなど推理的に読む能力が高いと言われている（門田修平・野呂忠司編 2001：137-139）。また、文法力、語彙力、リスニング力などの技能とも高い相関がある（門田修平・野呂忠司編 2001：145）。

今回の「試行試験」でも、中級者の方が問題文で参照する量が多い問題で初級者より正解率が高くなっているのは、こうした理由の存在も推測される。ワーキングメモリを鍛えるには、「なるべく母語を介さないで言語活動に従事させる」、「教室で与えるインプットの中に適度な長さで休止を入れ」たり「情報を繰り返し提示したりする」など、情報やタスクを整理して与える必要性が指摘されている（門田修平・野呂忠司編 2001：144）。

（c）母語と読解力

門田修平・野呂忠司編（2001）によれば、第二言語習熟度レベルが低い場合は、母語における読解力と第二言語における読解力との相関が低く、習熟度レベルの方が重要な要因となり、逆に第二言語習熟度レベルが高い場合は、両者の相関は高く、母語での読解力の方がより強い要因になっている。初級者の場合は、翻訳も大切な学習手段と考えられるが、熟達するほどその割合は低くなる。（門田修平・野呂忠司編 2001：194）。

ここからは学習者の段階に応じて、授業での母語使用を調節する必要が分かる。より高い熟達した学習者を育成するには、学習時間が長くなるにつれて母語の使用を漸減的にしていく必要が推測される。

（d）読解ストラテジーと読解力

認知論的アプローチからオックスフォード（1994）は、「記憶」「認知」「補償」の直接的ストラテジーと「メタ認知」「情意」「社会的」の間接ストラテジーを挙げ、門田修平・野呂忠司編（2001）は、読解ストラテジーの 1 つの整理として「読解プロセスを制御する（例：速度の調整）」、「読解をモニターする（例：予測）」、「情報源（背景知識）を活用する（例：情景を描く）」、「テキストとの相互作用を行う（例：翻訳する）」、「情報源（テキスト）を活用する（例：レトリック）」を挙げている（門田修平・野呂忠司編 2001：245-247）。大学英語教育学会（2005）は、こうした海外の英語教育での学習ストラテジーを整理し、「タスクとともに学習ストラテジーを指導する」「メタ認知ストラテジーを指導する」点が重要だとしている（大学英語教育学会 2005：98）。大学英語教育学会（2006）は、英語教育での各種のタスクによる学習ストラテジー指導を実例としてあげている。たとえば、初級者の中学生向けには、ファーストフードの注文の様子を聞かせるまえに、日本での注文の様子から必要な表現と順番を予測させて聞き取らせる、また、相手の悩みを英語で聞いてメモを取る練習をさせ、今度はそれを使ってアドバイ

スをするなど、言語学習ストラテジーと 4 技能を組み合わせた練習を提案している（大学英語教育学会 2006：61-72）。

台湾の日本語教育の場合も、会話や作文などの時間にこうした練習を増やしていくことで、語彙と文法および翻訳指導が中心の読解授業に応用できる学習ストラテジーの訓練が可能であろう。

（e）「日本留学試験」の解答ストラテジー

日本留学用試験である「日本留学試験」の試験対策では、読解の練習では以下の点がポイントにあがっている。

（あ）友松悦子・宮内淳・和栗雅子（2003）『チャレンジ日本語＜読解＞日本語留学試験対策』国書刊行会

基礎：言葉のまとまり、文のつながり、言葉の省略

実地問題：情報を拾う、5W1H をすばやく見つける、整理して読む、キーワードを探す、中心文と補助文を見分ける、文章の流れを考える

（い）和栗雅子、三上京子、山形美保子、青木俊憲（2004）『読むトレーニング基礎日本語留学試験対応』スリーエーネットワーク

必要な情報を探す、何度も出てくるキーワード、対になっているキーワード、接続語や指示語がキーワード、複数のキーワード

（う）三上京子、山形美保子、青木俊憲、和栗雅子（2005）『読むトレーニング応用日本語留学試験対応』スリーエーネットワーク

お知らせグラフなどから必要な情報を探す読み方、文章から必要な情報を探す読み方、対になっているキーワード、接続語や指示語がキーワード、数字がキーワード、比喩表現がキーワード、意外な意味を持つ言葉がキーワード

（え）佐々木瑞枝監修 EJU 日本語研究会（2004）『アカデミック・ジャパニーズ重点攻略　日本留学試験実践問題集　読解』ジャパンタイムス

内容と合っているものを選ぶ、問題の焦点を理解して解く、空欄に入るものを答える、筆者が最も言いたいことを選ぶ、適当な要約を選ぶ、適当な表現を選ぶ、文を正しい順番に並べる、具体例を考える、文章の続きを予想する、事実と意見の違いを読み取る、論理的に考える、文章を批判的に読む、共通点・対立点を読み取る

これらも言語事項の理解と同時に読解ストラテジーの訓練を行う形になっており、タスクと学習ストラテジー（読解では読解ストラテジー）の訓練とを読解で組み合わせることで、語彙・文型が高難易度であるばかりでなく、さまざまな高度の解答ストラテジーが必要な、実業能力にも応用できる読解力を育てられる方向性を示している。

4．おわりに

以上、「日本語能力試験」と同じ視点で作られている「2007 年度試行試験」の読解問題の試験結果から言えることは、「日本語能力試験」のようなタイプの試験で測定できる能力には、第二言語能力の熟達度を示す基礎日本語能力と、問題に解決の筋道をつけ、その過程の実行をコントロールする学習ストラテジーの一部をなす読解ストラテジーの能力とがあるという推測である。

「日本語能力試験」のようなタイプの試験には、日本語使用能力の実態にそぐわないなどの批判があるのは確かだが、しかし、今回の分析結果から見て、「日本語能力試験」のようなタイプの試験で高得点が出ない学生には、基礎日本語能力の未熟さか、効果的に問題処理や課題解決をデザインする学習ストラテジーの未熟さがあると推定される。「日本語能力試験」のようなタイプの試験は日本語での実業能力の基礎力が測定できると推測されるのである。

このことは、日本語教育の卒業生に実社会で求められる「ビジネスに必要な日本語能力」、「ビジネス文化・知識の理解」、「社会人を意識した行動能力」としての実業能力を育成する 1 つの方向には、現段階では、今までのような語彙、文法、文型指導を中心にした基礎日本語能力の熟達を徹底する必要性があり、もう１つの方向には効果的に問題処理や課題解決をデザインする学習ストラテジーの導入と練成があることを示している。この二つの方向のベクトルの合力が向く方向に、カリキャラムと授業でのタスクを向けていくことで、実社会で戦力になりえる日本語人材の育成を求める社会的要請にも、その対応の第一歩が踏み出せる。

本論文於 2008 年 12 月 13 日通過審查。

引用書目

オックスフォード レベッカ.L.／宍戸通庸・伴紀子訳（1994）『言語学習ストラテジー―外国語教師が知っておかなければならないこと』凡人社

国際交流基金・（財）日本国際教育協会編（2002）『日本語能力試験出題基準　改訂版』凡人社

大学英語教育学会・学習ストラテジー研究会編（2005）『言語学習と学習ストラテジー―自律学習に向けた応用言語学からのアプローチ』リーベル書房

大学英語教育学会・学習ストラテジー研究会編（2006）『英語教師のための「学習ストラテジー」ハンドブック』大修館書店

趙順文・賴錦雀・蕭次融・林文賢・篠原信行・王淑琴・盧錦姫・落合由治（2008）『大学入学考試中心　九十六年度第二外語日語考科試題研發計畫』大学入学考試中心

宮岡弥生・玉岡賀津雄・毋育新（2004）「中国語を母語 とする日本語学習者の文法知識が敬語習得に及ぼす影響」『広島経済大学研究論集』27-2 広島経済大学経済学会編/広島経済大学経済学会

横山紀子・木田真理・久保田美子（2002）「日本語能力試験と OPI による運用力分析－言語知識と運用力との関係を探る－」『日本語教育』113 号日本語教育学会

吉永尚（2007）「就職を視野に入れた日本語能力の育成について―ジェトロテストへの挑戦」『園田学園女子大学論文集』Vol.41 園田学園女子大学